

2 下高野の富士講資料について

藤 由美

はじめに

2018年の下高野の石造物調査において、福蔵院境内とその裏山にある嘉永2年(1849)から昭和3年(1928)の富士講の石造物4基を調査した(注1)。その際に、小澤一雄氏から、下高野には立石正一氏宅に富士講に関連する掛け軸やお札などの資料が多数残されていたこと、そして同家が2011年の東日本大震災で損傷した家屋を建て直す際に八千代市立郷土博物館にその資料を一括で寄贈されたことを教えていただいた。

筆者は、立石正一(八郎右衛門)家の富士講資料を撮影する許可を同博物館から得て、2018年8月18日、資料を写真撮影、その画像をもとに解説を試み、分類整理し、また各地の富士講資料研究を参考に考察をおこなったので、報告する。

調査した下高野立石家旧蔵の八千代市立郷土博物館収蔵資料の数は16点で、内訳は下の表の通りである。(表「博物館No.*」は八千代市立郷土博物館受入資料カードの番号)

表 下高野立石家旧蔵・八千代市立郷土博物館収蔵の富士講資料一覧表

No	資料名	形態	博物館No*
1	掛軸「御身抜」(五行身抜)	紙本墨書軸装	13-A-09
2	掛軸「御身抜」(五行身抜)	紙本墨書軸装	13-A-40
3	掛軸「御身抜」(「烏帽子岩」の歌付き)	紙本墨書軸装	13-A-39
4	掛軸「小御岳石尊大権現」(大小天狗画像付)	紙本墨書軸装	13-A-06
5	掛軸「小御岳石尊大権現」(「砂山と・・・」の歌付)	紙本墨書軸装	13-A-07
6	掛軸「木花開耶姫命の図」	紙本採色画軸装	13-A-25
7	「不二行者世代巻」文書(弘化5年2月)	縦紙(2枚巻物状)	13-A-12
8	行名免状「真行真面」(明治33年6月15日)	縦紙	7-A-1431
9	「崇判断」写し(大正12年2月3日)	折紙	7-A-1426
10	御詠歌写し「追膳(善)御札」他	縦紙	7-A-1430
11	「富士講代々図」	版本	7-A-1429
12	「浅間大神並扶桑教祖出現尊影」(明治19年7月)	版本	7-A-1432
13	御札「角行尊師之真像」3点		7-A-1427
14	御札「富士山祈祷御璽」3点		7-A-1425
15	護符「オフセギ」	小切紙	7-A-1433
16	「人穴御垢」	小袋(砂入り)	7-A-1437

1. 揃っていた「御三幅」

富士講の祭儀では3種の掛軸を特に「御三幅」と称し、富士信仰の御神語「参明藤開山」の唱えを記した「御身抜」を中央に、右に「小御岳石尊大権現」、左に「木花開耶姫命」の掛軸を並べて礼拝、また富士登山に携帯し山頂で掲げて拝んだという(注2)。

この3種の資料が揃って収蔵されていたことは、今回の調査での貴重な発見であった。

図1 「御三幅」の構成



No.6 「木花開耶姫命」

No.2 「御見抜」

No.4 「小御岳石尊大権現」

2. 「御身抜（おみぬき）」と富士信仰・富士講について

富士山は原始・古代は火山の神として、中世からは仏教と習合して修験の山「浅間大菩薩」として信仰されてきたが、戦国末期に富士山西麓の「人穴」にこもって角材の上での千日間爪先立ち修行し、浅間大菩薩から行名をうけたという「角行」（長谷川佐近藤原武邦）によって、富士への信仰が教義としてまとめられ、富士講の基礎が築かれた。

角行は各地の湖で水行、その法力とオフセギなどで病氣治しを行い、また万物の根元の浅間神から授かったという独特の異字を使って「身抜」という唱文を作った。

その後、江戸時代中期に角行の富士信仰を継承した江戸の行者「食行身禄」が、正直と慈悲をもって勤労に励むことを信仰の原点とし、男女同格を説き、「世のおふりかわり」を願って享保18年（1733）富士山七合五勺目の鳥帽子岩で31日間断食して入定、その近代的な倫理観の教えは「不二道」として、江戸から関東一円に普及した。

角行の身抜は、「明藤開山」（「明らかに富士山を開く」の意味）の神語に加えて謎の字や文も多く難解であったが、身禄は、「参」の一字を入れた「参明藤開山」の神語に唱え文句を加えた5行の「五行身抜」を書いた。富士講ではこの五行身抜の方がわかりやすいので、定型文となり、御師や先達の筆による写しが「御見抜」として尊ばれた。

御見抜は異字が多く翻刻が難しいので、図2左に文字と読み方の例を記す（注2）。

図2 「御見抜」

御見抜の文字と読み方				
便 <small>は</small>				齋 <small>ち</small>
参明 <small>さんみょう</small>	藤開山 <small>とうかいざん</small>	南 <small>な</small>	無 <small>む</small>	元 <small>げん</small>
南 <small>な</small>	無 <small>む</small>	長 <small>ちやう</small>	日 <small>じつ</small>	月 <small>げつ</small>
相門 <small>そうもん</small>	言心 <small>げんしん</small>	金仁 <small>きんにん</small>	開風 <small>かいふう</small>	心白 <small>しんぱく</small>
我 <small>が</small>	大我 <small>だいが</small>	大我 <small>だいが</small>	大我 <small>だいが</small>	大我 <small>だいが</small>
4	3	1	2	5
(唱える順序)				



No.1 「御身抜」



No.3 「御身抜」

資料 No.1 (図 1 中) と No.2 (図 2 中) は、典型的で正統な御見抜である。前者 (図 1 中) は「五行身抜」の下に、「常行巫／行年六拾一才」(「巫」は「つぐ」の意か)、後者 (図 2 中) には「常行巫／御山水仁而／行年／六十二歳／謹而写」との記載がある。

「常行」は、No.7 の文書に「山包講」(印)「先達」として「佐倉新町内肴町水戸屋利兵衛」の行名「常行鏡月清虫損」の記載があり、この御見抜も弘化年間に「立石八郎右衛門」に常行から渡されたものであろう。

資料 No.3 (図 2 右) は、御身抜の類型で、「参明藤開山」の神語の下に「烏帽子岩」の歌が添えられている。翻刻は下記の通り。「北口」とは登山口の吉田口のことで「北口本宮富士浅間神社」があり、登山者が多く、御師の屋敷も百軒以上あった。七合五勺の烏帽子岩は食行身禄が断食修行により入定した霊跡である。

「北口／登山／参明藤開山／ゑほし(烏帽子)岩／みろく(身禄)のたけ(嶽)と／頭われて／三万めでとふ／戸をさゝぬ御代／富士七合五勺／食行身禄イ杓*菩薩*／烏帽子岩入定」(イ杓*と菩薩*は異体字 イ杓は「御見抜の文字と読み方」参照 注3)。

3. 「小御岳石尊大権現」と「木花開耶姫命の図」の掛軸

富士山五合目の小御岳神社は、江戸時代に相模の大山石尊を勧請し、「小御嶽石尊大権現」と称されて天狗信仰と共に富士行者参籠の拠点となり、現在も登山道入口の神社としてにぎわう。祭神は木花開耶姫命の姉の磐長姫命とされる。

No.4 (図 1 右) は、「小御岳石尊大権現」の掛軸で、中央に大岩、その下右に大天狗像、左に小天狗像が立つ構図の掛軸は、市内でも高津地区寄贈の博物館収蔵品の掛軸など、各地に同版の図像が複数あり、江戸時代から使われた版本とみられる。

富士登山の際には必ず携行し、神社で「鎮」一文字「御金印」を押してもらうので、その印の数だけ登山したことになる。

No.5 (右写真) も「小御岳石尊大権現」の掛軸で、富士の山の絵の下に「小御岳御礼」の歌「砂山と／木山に懐妊／咎山に政る／このうゑも無」、その下に「小御岳石尊大権現／大天狗*／小天狗*」が書かれている。(*は異体字、歌の読み方は「砂山と木山にはらむ小御岳はとやまにまさるこのうえもなし」注4)

No.6 (図 1 の左) は、富士山の祭神「木花開耶姫命」描いた図に、記紀の「火中出産」神話とその神徳(安産・火災除け・五穀成就・養蚕・酒造などの守護神)を漢文で記した掛軸で、表装が破損しているが、絵と文はきれいに残っている。

漢文の翻刻は、「神代紀曰天孫曰汝所懐者非吾子／木花開耶姫命忿恨曰妾所娠若非／天孫胤必當集*滅實天孫胤者火不／触害即作無戸室入居其内放火烧／室煙内生三子大小無所害所以奉／稱安産并除火災救無實難守護神／也從保食神傳五穀以狭名田稻釀／天甜酒又養蚕*而織神御衣故五穀／成就酒蔵養*蚕*守護御神也」で、*は異体字である。

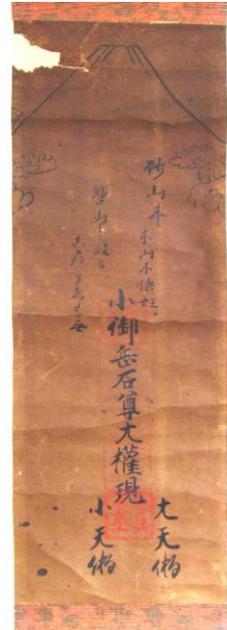
4. 先達からの免状等の文書

資料には、講の先達が発行した文書が2通ある。

No.7 の「不二行者世代巻」文書(図3上)は、「弘化^{五*}年戊申二月」に、「佐倉新町内肴町 水戸屋利兵衛」こと「山包講」の「先達」の「常行鏡月清口」より、「下高野邑八郎右衛門殿」あてに「免(ゆる)しの巻」として下された文書である。(*は推定)

豎紙2枚に流麗な字体で書かれた長文で、富士山の神仏の格、聖徳太子の開山、「書行藤佛」(＝角行)の事績(内八湖外八湖四海四嶋での荒行、人穴での角材上の爪立行、「御身抜」の啓示)と、「七世食行身祿」の事績(御身抜に「参」の一字を加えて「参明藤開山」と改め、荒行の後、享保十五年入滅、後に「菩薩」となる)とその教え、この文書の取り扱い方が記されている。

山包講は、江戸の修山禅行(包市郎兵衛)が天明5年(1785年)頃におこした講で、



No.5「小御岳石尊大権現」掛軸

禅行の弟子の市原市君塚の正行真鏡から、文政年間頃、安房をはじめ千葉県全域に広まったとみられる（注5）。

本資料は富士講研究には貴重な資料であるが、巻物状になった末尾の奥書部分が虫害と風化で傷んでおり、翻刻など史料として扱うには、修復が必要である。

図3 免状等の文書



No.7 「不二行者世代巻」 1枚目

2枚目末部分

No.7 「不二行者世代巻」 2枚目

No.8 行名免状「真行真面」

No.8 (図3下) は、明治33年、割菱講の第24世達行より立石鉄之助あてに発せられた行名「真行真面」の免状で、翻刻は「証／真行真面／烏帽子岩御法会年来／之孝信心ニ依而今般御伺／之上行名免之弥信心／無怠慢昼夜勤行可／令執達もの也／烏帽子岩北

面の伝師之続／廿参世／御禅定／達行真胤／免／発行真恭／取次／明治参拾参年／六月十五日／信心同行／下総国印旛郡／阿蘇村／立石鉄之助」である。

5. 手書きの写し

立石真行（鉄之助）が手控えに写したとみられる資料が2点ある。

No.9 (図4左)は「崇判断」写しの折紙で、「崇判断」の内容として「一筋 父母作罪／十七 年神産後死霊*」ほか33項目を列記し、末尾に「大正拾貳年二月三日写ス／立石真行」と記されている。講の行者として、村民の心配事の相談にも乗っていたのであろう。(*は異体字)

No.10 (図4右)は、「追膳(善)御礼」、「ぶくぬき」(服喪明け)、「二親の御礼」「虫封」の御詠歌の写しで、翻刻は下記の通りである。

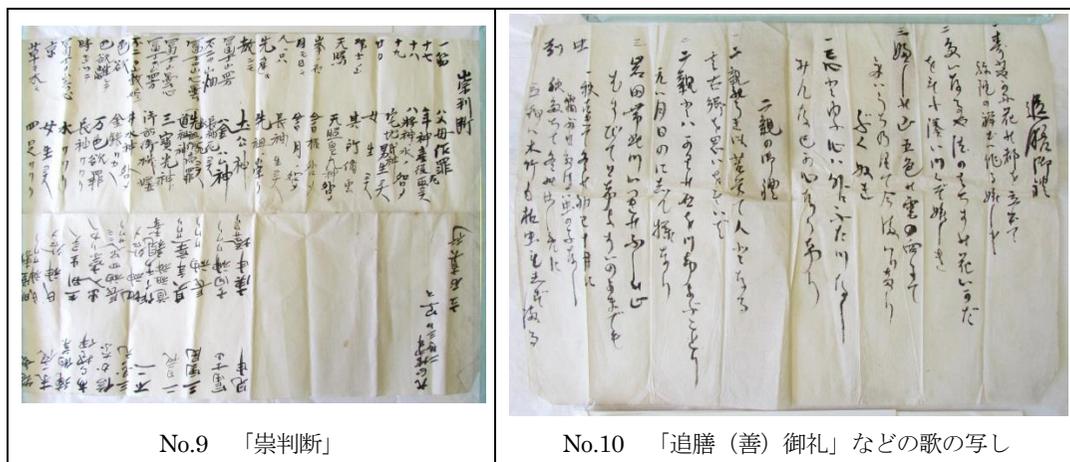
「追膳(善)御礼／一 すみやかに花の都を立出て／弥陀の禅土ハ作る嬉しき／二 たいなるや法のはちすの花いかだ／をもふ湊ハつくぞ嬉しき／三 ふしの山五色の雲の向にて／身ハうちのりて今まいりけり

ぶくぬき／一 忌とゆふ心ハ外ニふたつなし／みんな己か心なりけり

二親の御礼／一 二親うれい苦勞て人となる／其古郷を思いをもハば／二 二親とハかりの名をつけよぶことり／元八月日ににしん様なり／三 岩田帯此ついつきのふしの山／むすびてとけよすいのよまでも

虫封／一 秋すきて冬の初わ十月に／霜がれたけハ虫の子なし／一 秋たちて冬のはしめに／立物ハ木竹も枯虫もしずまる」

図4 手控えの写し



No.9 「崇判断」

No.10 「追膳(善)御礼」などの歌の写し

6. 版本

版本（印刷本）とみられる資料が2点ある。

図5 版本・御札・護符など



No.12 「浅間大神並扶桑教祖出現尊影」

No.11 「富士講代々図」

No.13
御札「角行尊師之真像」

No.15 護符「オフセギ」

No.16 「人穴御垢」

No.11 (図5 中上)「富士講代々図」は、高祖角行と二世日行・三世旺(がん)心・四世月旺・五世僧什(月行)、元祖身祿の尊像の絵で、天保3年(1833)の身祿百回忌に吉田の御師から印行された月行派の講祖代々の図(注6)と全く同じ絵である。

No.12 (図5 左)「浅間大神並扶桑教祖出現尊影」は、日月、富士山の図中央に「木花開耶姫命」神像、「明藤開山 藤原角行」、「人穴」と角材上爪立行中の角行尊像、中段に角行の事績、下段に「正統二世日旺師」から「六世光清師」までと、「別立五世月行師」「別立六世身祿参明藤開山食行身祿尊師」の系図と事績が書かれている。

江戸後期に江戸八百八講といわれるほどに普及した富士講は、明治元年の廃仏毀釈、明治4年の政府による御師制度の廃止により、明治8年に富士山の仏教的地名が変更され、富士講は教派神道の教会組織に再編成される。北口浅間神社が中心になって組織されたのが、扶桑教会である(注7)。

本資料は、欄外に「明治十九年七月十八日出板御届」とあり、静岡県権訓導の許可を得て、扶桑教会より出版されたものである。

7. 御札・オフセギなど御利益の品々

身祿は正直・慈悲・勤労など内面の信心を重視し、呪術を否定した教えを説いたが、町や村の先達は、御札の配布や、吉凶の占い、病気治しなどの庶民の現世利益にこたえる役割も負っていた。

No.13 (図5左上)の御札「角行尊師之真像」と、No.14 (写真省略)の御札「富士山祈祷御璽」は、手刷りの御札で、それぞれ3点ずつ残っている。

No.15 (図5中下)の小切紙は「オフセギ」という呪術用護符で、「参」の小字が多数版刷りされ、病気治しにはこれを切って飲むと効力があるとされた。

No.16 (図5左下)は「人穴御垢」小袋で、「開祖人穴御垢」と刷られた袋内には、角行が修行した洞中の砂が入っており、「オアカ」として信仰され、ご利益があった。

おわりに

今回の資料調査では、江戸後期から近代の下高野で、立石八郎右衛門が山包講、鉄之助が割菱講の行者として活動していたこと、また「御三幅」、版本、手控えの写し、呪術用の護符などの資料を通じて、講の継承者の系譜や地域での富士講信仰の姿を知ることができた。

最後に、資料の所在をご教示いただいた小澤一雄氏、八千代市立郷土博物館の皆さま、資料の翻刻に際してご教授いただいた野中正博氏と本会の畠山隆会員・菅野貞男会員に篤く御礼申し上げます。

* 注：

1. 蕨由美「下高野のムラの石造物」『史談八千代』43号 2018年 八千代市郷土歴史研究会
2. 「富士講の御見抜」『博物館だより No.4』 1995年 富士吉田市歴史民俗博物館
3. 『江戸川区の富士講と富士塚』2018年掲載の下鎌田講元資料の「御伝え」の一部に「烏帽子岩／身祿の嶽と／あらわれて／三方めてとふ／戸をさゝぬ御代」の歌がある。
4. 注3の「御伝え」には、「砂山と木山にはらむ小御岳ハ／とやまにくらへ又うへもなし」の歌がある。
5. 沖本博「江戸富士講の房総への進出」『富士浅間信仰』2000年 雄山閣出版
6. 「富士講代々図」 岩科小一郎『富士講の歴史』2000年 名著出版
7. 「明治前期における富士講の糾合と教派神道の活動」平野栄次 『富士信仰と富士講』2004年 岩田書店
8. 企画展特別展図録『No.12 富士をめざした安房の人たち』1995年 館山市立博物館